神戸女子短期大学　論攷　58巻　23－36（2013）

－資　料－

AWO キンダーガルテン「フレーベルハウス」の教育環境が幼児の心身の発達に及ぼす影響についての一考察

庄　司　圭　子

A study of the Influence of how the Education Environment at the AWO-kindergarten “Fröbelhaus” Contributes to the Mental and Physical Development of Infants

Keiko SHOJI

要　旨

F.W.A. フレーベルの教育理念を継承しているといわれる「フレーベルハウス」の教育環境を調査した。フレーベルの提唱した，感覚を刺激して感性を豊かにする環境は，園舎内や園庭に点在していた。特に，ブランコを囲む低木や「感覚の小路」は，見事な「感覚教育」の事例であった。環境からのメッセージが聞こえてくるのである。このような素晴らしい環境を，幼児の生活に十分に生かすには，保育者の環境に対する深い理解と指導センスが必要であることを確認した。

キーワード：フレーベル　フレーベルハウス　幼児　教育環境　感覚　感性

Ⅰ　はじめに

Friedrich Wilhelm August Fröbel（1782-1852，以下フレーベル）は，1839年にドイツの東部バード・ブランケンブルグに世界最初の保育者養成機関である「幼児教育指導者講習科」を設立し，講習生のための実習施設として「遊びおよび作業の教習所」を付設した。フレーベルは1840年５月１日からこの教習所を‘キンダ―ガルテン’（Kindergarten，幼児の花園）と命名[1)]した。

フレーベルの教育思想は日本の幼稚園教育に大きな影響を与え，明治９年（1876）日本に創立された東京女子師範学校附属幼稚園には，フレーベルが考案した「恩物[A)]」が導入されている。

日本語の「幼稚園」という名称も，キンダ―ガルテンを翻訳したものである。また幼稚園での活動で，明治以来，お遊戯，折り紙，描画，造形遊び，積木あそび，生活体験などが重視されていることや，園庭に菜園，花壇があるというのも，フレーベルの教育概念から生み出されたものである。

日本におけるフレーベルの研究は，日本の幼稚園教育の発展に大きな影響を与えてきている。筆者もまた，「自然が最もすばらしい教師である」「幼児は遊びによって学ぶ」「飼育栽培活動も非常に大切」と学生時代から教えられた当時のままに幼稚園教育を捉えて今日に至っているが，それは，フレーベルが1826年，今から186年前に『人間の教育』の中でその重要性を説いているからである。「自然が教師」「遊びの中で学ぶ」という教育理念に関して，荘司（2001）は，「フレーベルは人間教育を自然の手に委ねようと考え，指導（命令，制限，干渉）しないという「環境」（die Umgebung）による教育を提唱した。」[2)] と述べている。

現在，日本における幼稚園教育の基準を示す平成20年３月に改正された現行の「幼稚園教育要領　第１章　総則　第１　幼稚園教育の基本」に「幼児期における教育は，生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり，幼稚園教育は，学校教育法第22条に規定する目的を達成するため，幼児期の特性を踏まえ，環境を通して行うものであることを基本とする。」と示されているように，幼稚園教育は環境を通して行う教育なのである。

この度，筆者は，フレーベルが開設したキンダ―ガルテン（現在はフレーベル博物館になっている）のある町バート・ブランケンブルグと，その地に在る現在の AWO-kindergarten “Fröbelhaus”（AWO は，Die Arbeiterwohlfahrt の略で生活協同組合に近いもの，以下フルーベルハウス）を訪ね，筆者のこれまでの幼稚園経営の経験をもとにして，幼稚園の幼児たちの心身の発達に及ぼす教育環境に関する考察を深めるため，次に示す２点に焦点を当てて調査を行った。すなわち，フレーベルの教育理念を継承しているといわれている「フレーベルハウス」の園舎，園庭の環境に（１）今なお継承されていると捉えられる部分，（２）長年の月日の中で時代の流れとともに変化したのではないかと推察される部分，である。

Ⅱ　方法

平成24年８月27日，ドイツ，チューリンゲン州，バート・ブランケンブルグにある「フレーベルハウス」を，28日「フレーベル博物館」を訪問し，そこで得られた教育的知見を画像と文章によって記録した。

１　現在のフレーベル幼稚園といわれる「フレーベルハウス」を訪問

「フレーベルハウス」の施設・設備を含めた教育環境を感受しながら，通訳を介して教員へのインタビューを行い，園内環境が意図するものを探り，幼稚園の教育環境の在り方を考察した。

２　フレーベルが創設した幼稚園であった現在の「フレーベル博物館」訪問と資料の閲覧

博物館の学芸員の説明を聞きながら，通訳を通して質問を行った。また，陳列されている様々な資料に実際に触れた。それと同時に，フレーベルの求めている教育にも心を傾け，今の幼児教育に必要な事項について考察した。

Ⅲ　結果と考察

1　「フレーベルハウス」の概要

1）沿革

フレーベルハウスは，1908年に，現在3歳児から6歳児が使用している本館のみで開園された（写真1，2）。1950年に現在1，2歳児が居る新館が建設され（写真3，4），1955年に本館が改修された。

2）施設の概要

フレーベルハウスは，本館，新館の2棟の園舎と園庭がある。敷地は，約5,000m^2，園庭は，約3,500～4,000m^{2}である。本館の正面の壁には，KOMMT LASST UNS UNSERN KINDERN LEBEN（さあ，わたしたちの子どもらに生きようではないか！）（写真1）と書かれている。

3）教育理念

教育方針は，大まかには州（社会庁―Ministerium）が立てる。市町（Stadt）は市町にある各幼稚園にこれを要望（Wünsh）として伝える。出資者（Träger）は幼稚園に課題（Aufgabe）を与える。フレーベルハウスは，バート・ブランケンブルグのシンボルであり，町と幼稚園のつながりは緊密である。AWOは，このような町との繋がりも，フレーベルの理念に則った教

写真1　「フレーベルハウス」本館，道路側正面

写真2　「フレーベルハウス」本館側面

写真3　「フレーベルハウス」新館　園庭側より

写真4　「フレーベルハウス」新館　道路側より

育を行うことも理解し受け入れている。

チュ―リンゲン州の教育計画（Bildungeplan ＝教養を自ら形成していくという意味）は，0歳から10歳を対象としており，領域は7項目である。それは，①言語的教育，②運動健康的教育，③自然科学的・技術的教育，④算数的教育，⑤音楽的教育，⑥芸術的・造形的教育，⑦社会文化的・道徳的・宗教的教育である。フレーベルハウスでは，これに⑧遊び，⑨生活習慣的教育の2項目を追加して9項目で実施している。この教育計画の閲覧は可能であるが，持ち出しは禁止している。

4）教育方法

教育方法は，教育指針に基づいた方向性はもっているが日々の保育指導案はなく，一人一人の幼児の様子を見守り（Beobachten）観察し，その幼児の進度に応じて援助していく（Begleiten=同伴していく）。また，保育は権威で行うのではなく，あくまでも幼児の主体性を大切にしている。

保育内容は，天候にかかわらず，できるだけ毎日戸外で遊ぶことを基本にしており，好きな遊びだけではなく，日本ではクラスに相当するグループ全員での遊び，個人の遊び，保育活動の動と静を考えて組み込む活動，室内遊びと戸外遊びなどを幼児の様子をみて，工夫しているとのことであった。室内遊びでは恩物やビーズつなぎ等を取り入れ，フレーベルの創作した教材を活用しており，保育者同士で恩物研修も月1回行っている。

5）入園年齢，在籍数

申し込み資格は，バート・ブランケンブルクに居住している1歳から就学前幼児である。定員は125名，訪問時の登録数は136名であり定員オーバーの状態である。9月1日の就学を基本にして月齢別にグループに分けている。てんとうむし組，はち組，くま組，ちょう組，ひつじ組，あひる組，はりねずみ組等，昆虫や動物の名称を組名にしている。

6）職員

教員は園長を含めて17名，給食係1名，ビルガ―アルバイト（市民労働）2名，高校卒業後の兵役を拒否するが社会奉仕する[B)] 男女各1名，市民よりパート2名，計24名が働いている。

2 「フレーベルハウス」の庭

図1のように，正門を入ると右手にフレーベル幼稚園園舎（本館），左手に1．2歳児向け園舎（新館）がある。正面に平らな土の遊び場があり，休暇中であったためか調査したときは非常にのんびりとしていた。数人の幼児が乗り物で遊んでいる姿を，数人の職員か保護者らしい人が話をしながら見守っていた 。庭は広く，樹木が多く自然豊かで木製の遊具等が多い。

案内の教員の話では，「庭」は，自分たちで世話をするための幼児たち自身の庭であり，保護者や幼稚園の協力者が訪ねてきたときの場であるとのことである。また，幼児たちがままごとで遊んだり，暮らしの中のことの遊びをしたりするための場でもある。そのため，大好きな

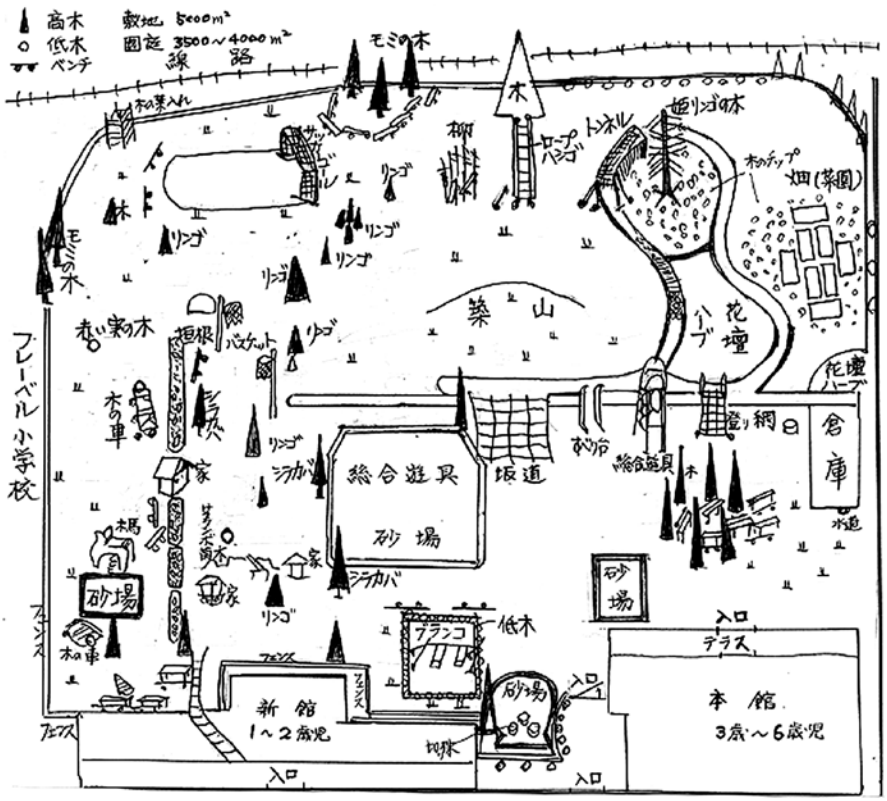

図１　「フレーベルハウス」園庭見取り図（撮影した写真を基に筆者が作成　2012年８月作）

隠れることのできる場所として生垣や柳や藪があったり，腰かけるベンチ（写真11，12）があったりする。また，「庭」は幼児たちの自由な空間である。走り回ったり，感覚の小路を通ったり，冬にはソリ滑りができる小さな築山を登り降りしたりする。そこでは，年長児が，年少児の手を持って登り降りする姿も見られるという。

日当たりのよい正面の芝生の広い部分と，奥の少し日陰になる高い木々が立った森のような所（写真11）と，生垣裏の囲まれた小さな庭（写真17）があった。中央の高木には，縄の梯子が掛けられて木登り可能となっていた（写真11）。

以下，庭を中心に，教育環境として特に印象に残った環境を取り上げ，その教育効果を考察した。

１）段差を繋ぐ木製遊具

庭は２段になっていて，その段差は１m足らずである。下段は土の部分が多く木製遊具，４か所の砂場，平らな土の広場があり，段差を利用してさりげなく上下段をつなぐ滑り台，登り網等の木製遊具が設置されている（写真５）。

（段差を繋ぐ木製遊具についての考察）

１日のうちに何度か下段と上段を往復するのであろう幼児の動線に，非常にごく自然にその

遊具が入っているのが分かる。上段下段の庭を行き来する度に，その遊具のもつ動きを経験することになる。正門から見てもその遊具はすぐに目に入り，魅力的なものである。もしそこに遊具がなければ，上段から下段に飛び降りる動きを選んで，怪我をする幼児もいるのではないかと思われる。このような簡単に飛び降りできる高さに遊具を仕掛けて，さりげなくその遊具が持つ動きを誘っているかのような環境であった。

写真５　上下段をつなぐ遊具

日本では，崖のような高さの段差を利用した，いかにも大掛かりな総合遊具を設置しているのはよく見かける。すぐ近くに階段があるので，早く下に降りたい場合は階段を選ぶ。登り降りの目的のためには，わざわざその大掛かりな遊具は使用しないのである。

「フレーベルハウスの庭」に設置されているこの簡単な木製遊具は，日常的に多様な動きを取り入れていくことが可能となり，幼児にとって頻繁に滑る，はう，よじ登る等の動作を行い，見下ろす気分を味わうことになるという教育上の効果を考慮して設置されたと考えられる。

２）砂場

多様な大きさの砂場が４か所に設置されている（写真６～９）。正門の前に中サイズ，本館の前に少し大きいサイズ，木製総合遊具の下は広い砂場，生垣に区切られた庭に小さいサイズの砂場がある。

（砂場についての考察）

砂場遊びは，幼児にとって非常に楽しく夢中になる遊びである。それだけに，友達が思わず振り上げたスコップから飛び散った砂がかかってトラブルが起こる場でもある。日本では，一部の敷地の広い幼稚園を除いては，大きい砂場が１か所に設置されているのが通例である。しかし，フレーベルハウスのように小さくても所々に砂場があれば，遊び場を選択することができる。日常的に幼児自身が，自分で「選ぶ」「決める」という選択肢を教育環境の中に組み込んでおくことは，非常に重要で求められることである。年少の幼児も，好きな砂場で好きな友達と安全に遊ぶことができる。これならば，怪我も少ないであろう。この意味で，フレーベルハウスの庭の砂場は，有機的な連携を持って配置されていると考えられる。

３）ブランコ

園舎から一番近い場所にブランコが設置されている（写真10）。ブランコの振幅範囲を低木で囲っていた。ブランコが揺れる正面延長の位置には，待機用・見守り用と思われる長椅子が置かれていた。

写真６　正門前にある中サイズの砂場

写真７　本館前の大きな砂場

写真８　生垣奥にある小さい砂場

写真９　総合遊具と大きい砂場

（ブランコについての考察）

ブランコは，誰もが経験した楽しい心地よいまた懐かしい遊具で，揺れる感覚，空中感覚を養う動きがある。しかし，最近日本では，幼稚園からブランコが姿を消し始めている。やはり怪我が多いからである。この結果，撤去されていない場合でも，ブランコの周りには必ず柵を作る。「ここから入っては危険」という柵である。前面には紐を張るか，プランターを置くことをしてきたが，フレーベルハウスでは低木が並んでいた。見事な教育感覚であると目を奪われた。「ここは，ブランコの場所よ」のメッセージが読み取れた。まさに‘感性に訴えている環境’と捉えることができた。

写真10　ブランコ

４）芝生の丘とサッカーゴール

小さい坂を登って上段の庭に上がると，そこは芝生の丘である。教員の説明によると，素足で歩いて，手や足の感覚を養うことをねらっている，とのことであった。芝生の丘には，小さ

な起伏がある（写真11）。通訳によればそれを築山と言うそうである。降雪時はソリ滑りをしたり，年長児が年少児の手を取って上り下りしたりする，幼児たちにとっては楽しい遊び場であるとのことであった。

築山の小ささに反して，庭の奥にある高木に囲まれたサッカーゴール（写真12）は，スケールの大きいものが設置されていた。

写真11　築山　奥のサッカー広場

写真11　築山　木に掛けたロープの梯子

（芝生の丘とサッカーゴールについての考察）

日本で経験するスリルのあるソリ滑りとは別感覚の体験であるように感じられた。降雪時の遊び場としては，この小さな起伏が安全なのであろうか。芝であるため，降雪時はかなり滑りやすいのであろうか。風土の違いが，どのように影響するのか推し量りがたいが，日本の幼児たちが，築山の斜面を駆け下りてくるダイナミックな動きは，この環境からは想像しがたいものである。

それに反して，サッカーゴールはさすがにサッカーの国ドイツといった感じである。ネットに向かって幼児がボールを存分に蹴ることができ，左右のどちらにボールが通り抜けたとしても「ゴール！！」である。幼児にとっては，あの大きいゴールを見上げただけでもワクワクしてボールを蹴りたくなり，爽快感を味わえるであろう。これもそのような感覚を刺激する環境の一つなのであろう。

5）感覚の小路

感覚の小路（写真14）は，「姫リンゴの木」（写真16）の周りを囲んでいる路で，柳で組んだトンネルがあり，路面に土，大小様々な石，丸太，砂，木のチップなど様々な素材が敷かれていた（写真15）。素足で遊び，足の裏から多様な感覚を覚えるように仕掛けられていた。ドイツでは，小学校に上がるときにお菓子，小さな本，文房具などが詰まった円錐形のお菓子の袋がプレゼントされるのだが（写真13），「フレーベルハウス」では，この「姫リンゴの木」が，「プレゼントを育てる木」と意味づけをしているとのことであった。花壇に咲くハーブの黄色い花をドライフラワーの花束にして，円錐の袋に入れるということである。その「姫リンゴの木」を感覚の小路の真ん中に据えて，木の根元周りは木のチップを敷き詰めていた。

写真12　サッカーゴール

写真13　就学時お祝いの菓子袋

（感覚の小路についての考察）

感覚の小路の中心に位置した「姫リンゴの木」は，根元に木のチップが敷き詰められていた。それは，特別な扱いをしている雰囲気を出していた。この木に象徴的な特別の意味を持たせていることが，一見にして感じられた。幼児は，感覚の小路を通る毎に「姫リンゴの木」からメッセージをもらっていることであろう。

しかし，夏休み中であったからか，素足で築山や感覚の小路を通る幼児はいなかった。通った幼児は数人であったが，みんな靴を履いていた。屋内も靴を履いて過ごすドイツの人に，素足になることが自然な行動なのであろうか。幼児の主体性に任せていて，いつ素足になって遊ぶのであろう。足の裏から伝わる様々な路面の感触は，いつ経験するのであろうか。屋内では靴を脱いで過ごす日本の幼児でさえ，今日では，自分から進んで素足になるのはごく限られた幼児であろう。保育者が，水遊びのときなどに，靴を脱いで「気持ちいいよ」と見せると，真似をして，少しずつ素足になる幼児が増えてくることは推測される。また，日本であると，幼

写真14　感覚の小路

感覚の小路　時計と反対回り入口

写真15　感覚の小路　時計と反対回り出口

大小いろいろな石が敷き詰められている。

児がお家ごっこをしたいと言ったときに，機会を捉えて「お家ごっこを芝生や感覚の小路でしては？」と，誘ってみるようなことも可能であろう。このような保育者のかかわりがないと，素足になるのは難しいと考える。素晴らしい教育環境も，そのねらいや願いを深く理解してい

写真16　姫リンゴの木

姫リンゴの木と柳のトンネル

る保育者の，機会を捉えた何らかの働きかけがなければ，ただ見守るだけでは何時まで経っても，その素晴らしい教育環境は，生かされることがないのではないかと危惧された。

6）隠れ場所

幼児にとって楽しい隠れ場所であるが，木の多いフレーベルハウスの園庭には，それにふさわしい場所が数多くあった。サッカーゴールの所から生垣にかけては，高木の陰になる。生垣も背が高く，切れ目が少ない。表の庭から完全に隔離された区画となっていた（写真17）。芝生の丘の奥も，ベンチがある（写真11，12）が正面からはよく見えない。

写真17　生垣に区切られた遊び場

（隠れ場所についての考察）

隠れ場所は，幼児にとっては格別にウキウキするところではあるが，日本では，目の行き届かないところがないように，カメラを設置しているところもある。森のようで本当に楽しい遊び場ではあるが，保育者が幼児の遊びの様子を把握し，安全面にもしっかりと配慮しておかなくてはならないと感じた。サッカーの遊び場では，３人対１人の幼児が，余り明るくない雰囲気でやりとりをしていた。

3　「フレーベルハウス」の園舎，教具

園舎の玄関から階段，階段の踊り場，トイレ，洗面所など本館２Ｆの事務所に着くまでの通路も細かく観察した。その結果と考察を次に示す。

1）園舎内の環境

玄関を入ると，右手の壁に世界最初の幼稚園（キンダ―ガルテン）のレリーフが飾られていた（写真18）。階段を見上げると，１段１段の階段に，１，２，３，４・・・の数字が書かれているのが目に飛び込んできた（写真19）。廊下の壁面に棒を小さい穴に挿し込む遊具も飾られていた（写真20）。何番目の穴に挿すか，また何本挿すかという遊びのようでもあり，穴と棒に色が塗られており，色合わせもできるようであった。グループ（クラス）の部屋の扉や壁面には，クラス名に昆虫や動物の木製名札が付けられていた（写真21）。

写真18　本館　玄関

写真19　階段

写真19　2階へ

写真20　廊下の壁に飾ってある遊具

写真21　クラスの名札　はちグループ

写真21　くまグループ

写真21　てんとうむしグループ

（園舎内の環境についての考察）

幼児は，階段を一段一段数えて上がることが多い。数字とともに楽しく上がることもあるだろうし，数字に励まされるときもあるだろう。一日のうちに何度登り降りすることであろう。日々

の生活に密着して数字がある。日々いろいろな意味を持って，通る人に語りかけてくる。まことに見事な教育感覚である。

保育室の名札は，非常に愛らしくいかにも楽しくなる。中で楽しい生活が待っているようである。

2）恩物

フレーベルハウスでは，保育に恩物を活用した遊びがあるが，フレーベル博物館には，フレーベルの考案した第3恩物として1㎝立方体の非常に小さい積木も陳列されていた（写真22)。筆者が幼稚園に勤めた新任時代には，幼児たちが恩物で自由に遊んでいたが，その大きさはおおよそ3㎝立方体のものであった。学芸員は，1㎝立方体積木は，当時幼児が遊んでいたもので，3㎝立方体の積木は，フレーベルが保護者に指導するときに使用したものであると説明した。

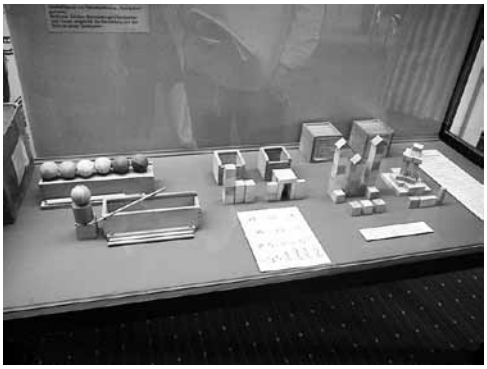

写真22　フレーベルが発案した恩物
（1㎝立方体積木）

（恩物についての考察）

幼児用恩物は，今日まで改良されて変化し，今の大きさ（3㎝立方体）になったといわれている。確かに今の3㎝立方体のほうが扱いやすい。しかし，幼児期は神経系統の発達が著しい時期であるので，フレーベルは，指先の細かい動作や神経を集中することの必要性を，1㎝立方体積木の大きさに込めていたのではないかと感じられた。フレーベルの考案した教材には，刺し絵，折り紙などの遊びもあるが，それらは，やはり手先を使い集中力を要し，先を見通す力の必要なものである。

Ⅳ　まとめ

今回の調査を通して，今，日本で求められている環境による教育は，まさにフレーベルの思想であることを改めて認識した。しかし日本の現状は，敷地の広い恵まれた幼稚園は自然豊かであるが，多くは，周辺に鉄製や合成樹脂製の遊具が並んでいる運動場的な平地の庭，コンクリートと人工芝の狭い庭等であり，砂場があっても，教師がうまく指導ができないからといって幼児に使わせない幼稚園もある。

フレーベルハウスの庭は，まさに自然に近い姿で整備されており，フレーベルが人間教育を自然に委ねようとした教育理念の根幹が，継承されているものであることが認識できた。

1）環境とはどのようなものであるべきなのか。環境が懸命に幼児に伝えようとしている，またさりげなく誘っている，そのような考案者のメッセージがしっかりと伝わってくる環境が，教育環境であると言えるであろう。その環境には，指導者の幼児教育に関わる様々な願いが

凝縮され込められているのである。一般的な日本の幼稚園に設置されている遊具を見ていると，幼児の元気に活動する姿は見えてくるのであるが，フレーベルハウスの庭が持つような，その遊具にかかわる幼児の心の中の活動やつぶやきのようなものが届いてこないのである。遊具自体の持つメッセージが乏しいのである。

2）数，文字，記号，色の認識，多様な動きと感覚等が，日々の幼児の生活に密着して動線の中に組み込まれ，幼児の心と体に沁み込んでいく状況をつくることが重要であると考えられた。

しかし，日本の幼稚園で時々見かけるが，保育室の壁に，諺を書いた紙や，ただ単に，あ・い・う・え・お・が書かれた紙や，ピアニカの鍵盤を示したものが貼ってあるのとは，全く意味が違うのである。それが常に幼児の身近なところに存在しても，その掲示物から発信されるメッセージは，実際のものとの対応が全くない状況で，幼児にとって楽しくもなく，必要感も興味もなく，幼児の求めているものではない。

3）今回の調査は，夏季休暇中であり，また参観時間が1日の午前中という制約された時間におけるものであったので，幼児の普段の様子ではないということも考えられるが，工夫された環境がねらっていることや保育者が素足で遊ぶことを願っているにもかかわらず，幼児が実践していない状況を見ると，そこに必要と思われるのは保育者の指導センスである。幼児にとっては，自由感に満ちているが，それぞれの幼児が，環境のねらいをいつか経験して，心地よく感じているというような指導技術を，保育者は備えたいものである。また，幼児に任せるほどに幼児の様子をしっかりと見て，安全面と遊びの内容と心の状況を把握して，適切な関わりをもつことを心掛けなければならない。素晴らしい環境を十分に生かすには，保育者の環境への深い理解と指導センスが必要である。

4）今回の報告において，第3恩物立方体積木の大きさが，フレーベルの創案当初のものから変化して，日本の現在使用のものになっていたが，この変遷についての調査は，今後の研究課題としたい。

参考・引用文献

1）小原國芳・荘司雅子監修，小原哲郎，フレーベル全集第4巻 幼稚園教育学，玉川大学出版部，805-806，(2001)

2）荘司泰弘，山口大学教育学部研究論叢第51巻第3部フレーベルの恩物研究（第18報）－園庭について－，221，(2001)

A）恩物とは，(Gabe（ドイツ）の訳語。神から賜った物の意）フレーベルの考案による幼児のための遊具。球・積木・板・棒などから成る。明治10年代，日本にも導入。(広辞苑)

B）ドイツでは良心的兵役拒否ができることが法律で定められている。拒否の場合は6ヶ月間の兵役の代わりに13ヶ月間の社会福祉活動が義務づけられている。この義務は25歳までに果たす必要がある。